

令和7年度入学者一般選抜入学試験問題

(C日程 国際地域学部)

小論文

注意事項

- 1 試験時間は、午前10時から午前11時30分までである。
- 2 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 3 この試験では、問題冊子(3ページ)、解答用紙2枚及び下書き用紙1枚を配付する。
- 4 試験開始の合図があつてから、解答用紙に受験番号を必ず記入すること(氏名の記入は不要)。解答用紙は2枚あるので、必ず2枚とも記入すること。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に縦書きで記入すること。所定の解答欄以外に記入した解答は無効である。
- 6 問題冊子及び解答用紙にページの欠落や印刷不鮮明な部分等がある場合は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 7 原則として、試験時間中の途中退室は認めない。
ただし、具合が悪くなつた場合、トイレに行きたくなつた場合等は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 8 試験終了の合図があつたら直ちに筆記用具を置くこと。
- 9 試験終了の合図があつて筆記用具を置いたら、机の上に問題冊子と下書き用紙を重ねて置き、その上に表おもてにした解答用紙を問一の解答用紙が上になるように重ねて置くこと。
- 10 試験監督者の許可があるまで退室しないこと。

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

当年五一歳。わたしは様々な束縛から自由になりたくて、フェミニズムの考え方にこだわってきた。が、ジェンダーバイアスを指摘すれば周りとの摩擦を起こす。自分自身も、ジェンダー意識をようやく一枚はがしたと思ってもまた新たな囚われに気づく。^①私の生き方を問うフェミニズムから逃げ出したくなることもある。

子どもの頃から「女は損だ」とたびたび感じ、女であるが故に軽んじられたり特別な役割を押し付けられることに漠然とした反発を感じてきた。大学生になって女性問題に関する本を読み、女性差別が私個人に問題があるのではなく、歴史的、社会構造的な問題であることを初めて理解することとなった。^②フェミニズムの考え方は、生きにくさを感じていた私に影響を与え、一つの大きな支えとなった。

就職した職場は労働組合が強く、女性たちも夜遅くまで労使交渉に参加するなど労働条件の改善に取り組んでいた。しかし、ことが生理休暇やお茶くみの問題となると、とたんに男性組合員たちの反応が鈍くなり、「いいなあ。女の人は生理休暇がとれて……僕もほしいなあ」「力仕事は男がしている。女性が入れるとおいしいし、お茶ぐらい入れてよ」という発言が飛び出す。お茶くみは当然のように女性の仕事になっていて、若手の女性組合員の間ではやめたいという話が出るのだが、課に帰ればパートの女性たちが男性にせっせとお茶を出している。彼女たちの立場は弱く、「お茶は自分で入れて」宣言などできる状況ではないし、お茶をいれてあげたいという人もいたりして状況は複雑である。もし自分だけが差別待遇から逃れても結局はパートにしわ寄せがいく。せつ

かくの既得権を手放したくないという男性たちの本音と絡み合って、職場での性別役割分業の象徴というべき「たかがお茶くみされどお茶くみ」問題はなかなか改善しなかった。かれこれ二〇年も前の話である。私たち女性は男性組合員たちに利用されているのではないかという不信さえ抱いた。女性の労働条件改善問題は、時として、経営者、男、女という多くの相手と闘わなければならない。職場で女性差別反対を主張するならば、男に頼らず、男に負けない実力をつけて、女性の権利を認めさせなければならないと考えて、仕事でも組合活動でも「だから女は……」と言われないように努力した。そしてある程度の評価は得たと思う。私は、職場の男たちから「うるさい生意気な女」と見られても意に介さない強い女になった。……この時、私自身が、弱肉強食の力の論理が支配する男性社会の価値観に染まっていることには気づいていなかった。

ところがその後、二人めの子どもの出産を機に仕事をやめて、専業主婦になった私の生活は劇的に変化した。仕事に追われる夫をあてにできないまま、ひとりで病気がちな子どもの世話に責任をもたなければならず、心身ともに疲れ果ててしまった。^③「しんどくても僕は仕事の愚痴をこぼさないし、あなたの愚痴も聞きたくない」という姿勢の夫とは頻繁にぶつかる。「甘えてはいけない。もつとがんばれ」と自分に強いるしかなかった。密室の中でがんばればがんばるほど、私のストレスは子どもへの強圧的態度となって向かっていく。「あれをしてはいけない」「これを食べてはいけない」「禁止形ばかりの生活で、さぞかし子どもの心は不安定だったろう。私自身も不安定な心理状態で、うまくいかない子育てと社会に参加する実行力のない弱い自分に対して自信を失っていた。

そんなあるとき、新聞記事である緊急の集会が開催されることを知り、行動で表さなければという衝動に駆られて意を決して出かけた。そこで活動を続けるかつての友人を見つけた。彼女は冷ややかに私を一瞥した。女を「戦う女」と「沈黙する女」に分けて、向こう側からこちらを見ているというまなざしだった。私が会場にいたことが場違いなように思われ、さらなる孤独を感じて帰ってきた。

子どもたちがようやく小学生になった頃、たまたま参加した子育て講座で「子育てにがんばり過ぎなくていいんだよ。自分をもっと大切に」というメッセージをもらい、初めて自分が虐待の一手前の状態だったことを明かした。否定しないで私の気持ちを受け止めようとするその場の空気を吸って、胸のかたまりがやっと解け出したように感じた。

子どもたちの成長とともに、妻、母、嫁としてではなく自分自身として関われる社会との接点を求めて、パート、女性問題講座、地域活動と範囲を広げていったが、気持ちが前向きになれたし、「自分らしく」生きようとすることで、子どもに対しても世間と比較することが少なくなったと思う。

しかし、外を飛び回る私を義母は苦々しく思っていたようだ。義母から「したいことがあるなら家を出なさい」と怒りの鉄拳が飛んできたのである。義母とはそれまでも何回か摩擦があったが、今回は激震であり、義母の怒りの背後に夫の本音も感じる（「家のことをちゃんとしたら何をしてもいい」と言われていた）。家庭内の^④ごたごたを避けるために、私は外に出ることをやめて、再び、家事と育児を優先させることを選択した。しかし自分の意に沿わない選択をしたために大きな閉塞感と無力感に襲われ、心身をコントロールできない状態に陥ってしまった。生きる力が湧かないのだ。この時、私は頭のなかで幾重にも

自分を否定していた。嫁、妻、母としての立場しか必要とされない自分って何だろう……こんなに何度も義母とトラブルを起こすのは私の性格に問題があるのだろう……いいや、「これは夫婦間の問題だから口出ししないで」と毅然とした態度をとるべきだったのか？いくらフェミニズムを学んでも実生活で勇気を出せない……私の生きる姿勢を問いかけてくるフェミニズムがうつつとしく、遠ざけたかった。理想と現実の狭間で、このような思いに苦しんだことがある女性も少なからずいるのではないだろうか。

ところがやがて、長い沈潜の時を経て、後は這い上がるしかないというような「居直り」の気持ち私が私のなかからむくむくと湧いてきたのである。やっぱり「自分らしく」生きたい。正面突破が大変なら、もぐらたたきのもぐら方式でいいじゃないか。そして、私が納得する自分なりの方法で解決していこう。今まで「くねばならない」という考えに囚われすぎて、自分の気持ちの到達点との間にねじれを起こしてきたのだ。たとえ私の頭が「くねばならない」と言っても、心と体が受け入れられるまでじっくり待ちつつ「私」のなかから湧きあがって来るものを大切にしよう。何度か頭を打つ経験をして、この時ようやく、かつて私が強い女になろうとしたこと、友人の一瞥、挫折したときの自己否定、これらがどこから来たのが理解できたような気がする。フェミニズムのジェンダーによる支配・被支配関係を壊して各人の関係を水平にしようとする考え方に共感しながら、その実は支配される女の側にもフェミニズムを頂点としたピラミッドを持ち込もうとする価値基準が働いていたのだと思う。女性を「できる女」と「できない女」に分け、「くねばならない」という外部規範の基準で「自分らしさ」を築こうとしてきたから、ある時は自信に満ち、またある時は自己否定に苦しんだのではないか。長い時間がかかったが、自分の傲慢さと

縛りからまた少し自由になれたと思う。

ある時、ジェンダーに関連したテーマを綴る同人誌で出会った女性たちの関心と感性は多様で、目からウロコが落ちる経験をした。マンガ、映画、音楽、趣味など日常のツールを通して、生活者としての等身大の自分の思いを表現した言葉がちりばめられていた。女性たちが持つ多様な関心と柔軟な感性を認め合う心地よさと水平のつながりへの信頼を感じた出会いだ。私の周りには、ジェンダーフリーを進めるためのテーマを毎年一つ設定して具体的な活動をしている六〇代の女性がいる。「自分は『探す』ものではなくて『つくる』もの」だと考えて、これまでの自分が培ってきたことを土台にした活動を模索している五〇代の女性がいる。子育てに悩む母親たちへの共感から「親支援」活動をパワフルに展開している三〇代の女性たちがいる。年代の違うこれらの女性たちとは公民館のジェンダー問題の講座で知り合ったのだが、現在は互いの情報交換をしたりアドバイスをもらったりと新たな視点を得ている。普段はそれぞれが自分の生活と活動で精一杯の状態だが、女たちが黙っていられない「いざ」という時には繋がれるのではないかという予感がしている。私のなかで、ゆるやかなシスターフッドへの信頼と期待が育ちつつある。

中本 英里 (二〇〇六)『「ねばならぬ」から『自分らしさ』へ』より

『ジェンダーの視点から社会を見る 出会い 気づき つながりへ』

ジェンダー・学び・プロジェクト(編)

発行 (社)部落解放・人権研究所

発行元 (株)解放出版社

pp125-pp131

傍線は出題者による。また、原文の小見出しは省略している

設問

問一

筆者が「『ねばならない』と「自分らしさ」との間で葛藤する過程を、フェミニズムとの関わりを軸として述べなさい。傍線部①と傍線部②のような、一見すると矛盾している態度にも着目し、三〇〇字以上五〇〇字以内でまとめること。

問二

筆者の夫の言葉である、傍線部③「しんどくても僕は仕事の愚痴をこぼさないし、あなたの愚痴も聞きたくない」と、傍線部④「家のことをちゃんとしたら何をしてもいい」を手がかりに、この夫が専業主婦についてどのような考えを持っているかを推測し、それが筆者をどのように追い詰めているかを、三〇〇字以上五〇〇字以内で説明しなさい。